

一七世紀フランスが垣間見ていた日本

大 場 恒 明

一三世紀末、マルコ・ポーロが『東方見聞録』の中で、中国大陸の「海岸から東方一五〇〇マイルの大海中に位置し」偶像を崇拜する異教徒の住む黄金の島「ジバング」について語った。これを嚆矢としてヨーロッパの文獻に日本についての記録が見られるようになっていくが、一五世紀から一六世紀初頭までの大航海時代には、ヨーロッパ人にとって日本はまだマルコ・ポーロが夢みた伝説の国の域をでなかった。

ところが一六世紀中葉、状況は一変して日本関係の文獻の数はにわかに増大する。いうまでもなく、日本でのイエズス会を先達とするキリスト教の布教と、一六世紀から一七世紀への移行期にイギリスとオランダが前後して設立した東インド会社の通商関係者たちによる日本滞在が、日本の地理、風土、日本人の人種的特性、風習、宗教、文化、言語、政治、経済等々の実状を報告する膨大な量の文書をもたらしたからである。

日本人アンジロウ（ヤジロウ）の直接的な証言やフラ

ンシスコ・ザヴィエルをはじめとする宣教師たちの報告書簡によって、日本は夢幻の霞の中から現実の世界に引き出されていく一方で、異文化摩擦や皮相な観察と偏見が歪んだ日本観を生み、その後の長い鎖国期を経てその誤解がヨーロッパ人の認識の中で増幅しつつ定着し、その一部は今に至るまで尾をひいている。

一六世紀から一七世紀に及ぶ日本のいわゆるキリシタン時代に、布教と通商において日欧関係を実践的に結んだのは、ポルトガル人、スペイン人、オランダ人、イギリス人であり、これに対しフランスはこの時代、日本とほとんど直接的な接触を持っていない。フランスの一六世紀後半はカトリック派と新教派の凄惨な内戦で混乱し、アンリ四世のナントの勅令で一応収拾がついたものの、十七世紀にはいつてルイ十四世によるナント勅令の廃止があり、新教徒の派閥的反抗とそれに対する熾烈な迫害が続いた。そのうえ、対外的にはスペインとの三〇年戦争をはじめハプスブルグ家、イギリス、イタリアとの戦

いに明け暮れ、政治的にも宗教的にも内憂外患をかかえ、はるか東方の果ての日本に関心を寄せる余裕はなかった。しかもソルボンヌ神学部は、教義問題でイエズス会と激しく対立し、これを国外追放に処した。一六〇四年にフランス復帰を認められるものの、一八世紀にはふたたびフランスから追放されるなど、イエズス会はフランスとたえず対立関係にあった。東方交易については、フランスはイギリス、オランダについて一六〇四年に東インド会社を設立しているが、日本との関係では、布教あるいは通商において他の四カ国にまったく遅れをとることにあった。

この時期、記録には残らないながら、日本に滞在したフランス人はいたと思われるが、確認できることとしては、わずかに、一六三六年ドミニコ派の宣教師ギョーム・クールテが布教を志して日本に潜入し、翌年長崎で殉教したことである。それより先一六一五年ローマをめざしてバルセロナからジェノアに向かった支倉常長の一行が、途中悪天候のためフランスのサン・トロペに寄港したさい、当地の領主が書いた詳細にわたる日本人の観察記録が残されていること、ぐらゐが直接的な日仏交渉の痕跡を示すものである。

一六、七世紀フランスにおける日本関係文献は、数が少ないばかりではなく、そのほとんどが、他国語による

記述や先行文献に依拠した二次的な資料である。当時のフランス人はこうしたわずかなばかりの文献を通して、東方の果てにある日本という国を垣間見ていたわけである。

ペーター・カピツァ編

『ヨーロッパにおける日本』全二巻十別巻

Japan in Europa : Texte und Bild dokumente zur europäischen Japankenntnis von Marco Polo bis Wilhelm von Humboldt / herausgegeben von Peter Kapitza / München : Judicium, Bd. 1, 2 & Begleitband (1990)

副題にあるように、マルコ・ポーロから、ウィルヘルム・フォン・フンボルトなどによる本格的な学術研究が始まる一九世紀後半にいたるまでの、ヨーロッパ人の日本に関する認識の変遷を示す計二〇〇〇ページにのぼる資料集である。原文ないしはドイツ語訳で収録された文献は、編纂者の概説紹介だけのものを含めて四六二点。地図約一〇〇点、その他の図録約五〇〇点。別巻は索引など。

宣教師たちの膨大な報告書や商人たちの些末な記録にいたるまで渉猟し収集することがいかに難事であったか容易に想像できる。それらを遺漏なく網羅するのはとうてい不可能である。日本ではよく知られているアビラ・

ヒロンの『日本王国記』がもれていたりするけれども、ヨーロッパ人の数世紀にわたる日本観の形成に決定的な原動力となった情報の実相と系譜を俯瞰させてくれるこの大部な資料集の編纂は画期的な事業であり、その功績はきわめて大きい。

編纂者の眼は、つい見落としがちな文学作品の中の記述にも行き届いていて、一見荒唐無稽な先入観が読者の意識の底にいか根強い日本像の幻影を定着させていくかという、異文化接触の根源的なメカニズムをなす屈折と変容の問題を、一貫して見据えていることが感じられる。この資料集の文化史的な価値を高めているのは、一七・八世紀ヨーロッパ文学史研究家としての編纂者のこうした資質である。

『ヨーロッパにおける日本』に収録あるいは紹介されている一七世紀のフランス語文献は一七点。(重要な文献で収録もれになっているものが、管見にはいっているものだけでも数点あるから、実際には、もっと多いはずである)

文献を内容から見れば、イエズス会の布教活動に関連する日本の宗教的政治的状况について書かれたものも、つとも多く、つぎに日本人の風習、特性に関するもの、日本の言語に関するもの、空想旅行記などである。

日本人および日本語

ヨーロッパ人が日本に言及するさい、インドおよび中国の問題と関連して、あるいは、混同して論じる、という傾向は一六、七世紀の文献にも顕著であるが、一方、さすがにこの時期になると、日本の独自性に注目してその特性を探ろうとする知識人も多くなってくる。

日本に滞在する宣教師、学問的な目的をもつ旅行家あるいは言語学者などが、日本民族の起源や言語についての考察を発表するようになる。

たとえば、以下は、一六六三年パリで出版された

Melchisedec Thevenot, *Relations de divers*

voyages curieux の一節の翻訳である。筆者はパリ国立図書館員で旅行家、言語学者。(ただし、この論述は

著者のオリジナルではなく、一六五五年にアムステルダムで出版された Martinus Martini, *Novus Atlas Sincensis* からフランス語に訳出されたものである。)

「大方の意見は日本人が中国から渡来したとしているが、私もその説に賛成である。だが、私は日本人がおしなべて一様に中国人の末裔であると考えているわけではない。なぜなら、大陸東部のタタール人が日本に住んでいたのは疑いもないこ

とだからだ。彼らはエゾ地を経て入って来たのである。彼らにしてみればエゾ地は狭い海峡で隔てられているだけの、手近な隣地であり、小舟で渡れるのだ。あるいは多分、海が氷結している時期に渡ってきたかもしれない。なにしろ、そこはいつも寒さがきびしく冬は酷寒の地となるからだ。私にそう確信させる根拠が三つある。一つは、日本人はタタール人同様頭髪をほんのわずかだけ残して切り落とし、頭部のほかの部分はまるで禿げたように剃りあげられているということ。顎に生える髭は毛抜きで引き抜く。このような慣習は中国ではかつて一度も行なわれたことがない。二つ目は、日本人は話すさいに時折D音とR音を使うが、中国人はまったくこれを使わないこと。中国語にはこの二つのどちらもないからだ。Rは中国人がどんなに細心に心をくばってやってみても決して発音できない。三つ目は、日本語は中国語とは非常に異なっているという点である。中国語とはまったく関係がなく、一致点もない。・・・・・

たしかに、日本人は西暦六〇〇年頃宗教と学問を中国から導入し、日本語をより書きやすくするために、漢字のあるものは変え、さらに使いやす

い別な文字をつけ加えた。さらに付言すれば、日本人が着る着物は、中国人が、ハナ(Hana)王朝「漢」Han」時代に、当時考案された頭髪を束ねるヘア・ネットをし、一種のスベルペリチュウムのような非常に長くゆったりした袖のついた、踵まで垂れさがる着物を着ていたのと同じだし、中国人が当時着ていたのと同じような着物を今だにしている。このことからして、日本人が服装についてはモードを変えなかったどころかそれを維持し、今日なお守り続けているのは見やすい道理であろう。

中国人の記録によれば、日本国王は中国皇帝に使節と貢物をおくる慣わしだったが、この使節派遣はユエナ(Juena)王朝「元」Yuen」の始祖タタール帝国皇帝が中国全土を征服してしまおうと、日本に海軍をさしむけ始めたので、それ以来中止された。日本人は攻撃軍を追い払うだけでは満足せず、国内にいるタタール人は見つけ次第一人残らず追放したので、それ以後彼らは日本に対して手出し出来なくなった。そのような経緯があるため、日本人は中国人がいくじなくタタール人に屈したことを責め、またそのことから、悪感情が自然に生じて双方の間の凄惨な戦いにいたること

がままある。日本人はいく度となく中国を侵攻し、海岸の要地を襲撃した。特に朝鮮各地はしばしば兵火と流血の巷と化した。・・・

中国人は日本を *Gepuen* と呼ぶ。 *Gepuen* と

は、太陽の上昇と誕生を意味する固有名詞である。なぜなら中国人から見れば、日本は日照を最初に受ける国だからである。マルコ・ポーロは、日本人をタール風に *R* をつけ加えて *Zipangri* と呼んだが、それは *Gepuengin* というのと同じである。

Ge 「日」は太陽を、 *Puen* 「本」は起床あるいは誕生を、 *Gin* 「人」は人を意味するから。」

(「」内注記は大場)

日本の言語への関心も非常に高くなったのは、宣教師たちの伝導上の必要からという当然の理由のほかに、ザヴィエルが「悪魔の言葉」と嘆いたほど西洋人にとって難解な日本語の特殊性が注目されたこと、宣教師たちの報告書とともに本国に送られた日本語の毛筆文書を通して、あるいは一五八四年から一五八六年までヨーロッパに滞在した天正遣欧少年使節の一行を介して、ヨーロッパ人が日本語にふれる機会そのものが増えたという事情もあろう。

しかし、日本に滞在した経験のないヨーロッパ人が、

日本語の教本もない当時、宣教師とか商人が書いた体系的でない解説文や、伝聞にたよって日本語を理解しようとすれば、断片的な知識しか得られなかっただろうし、とんでもない誤認をおかすこともあっただろう。

「日本語は単一であり、すべての日本人に共通である。しかし、非常に変化に富み多様に使われるので、あたかも、異種の日本語があるようにみえる。つまり、一つ一つのことがらについて、数個の言葉があり、そのうちのあるものは卑しめて、あるものは敬意をこめて、あるものは貴人たちの間で、あるものは庶民の間で、あるものは男たちの間で、あるものは婦人たちの間で、という具合に用いられる。それだけでなく、話し言葉と書き言葉とは異なるし、さらにその書き言葉でも、書簡の書き方と、散文、雅文、韻文と多岐にわたる書籍の書き方とはそれぞれ違う。さらに、彼らが用いる文字は一字一字があるものを意味している。そればかりでなくエジプト語や中国語と同じように、一字でもってある文意さえ表すのである。日本語は品格からしてもその豊饒さからしてもラテン語より好ましい。だから、日本語は習得し話せるようになるまでに非常な労苦と長い時間がかかる。」

かるのである。・・・

日本人はわれわれのように、左から右へではなく、上から下へ書く。その理由は彼らに言わせると、実にとるに足らないことだ。つまり、人間の立居振舞もまったく同じく、足を下に、頭を上にしてするのだから、上から書き始め下で終わらなければならぬというのである。・・・

ここに日本の簡単なアルファベットを示す。上から下へ、縦一列ずつ並べてヘブライ語のように、右から左へと書き進められている。・・・

何人かの著述家たちは日本の住民のいくつかの言葉がアイスランドの住民の言葉と符合することを指摘している。このことは両国の間にかつて交易があつた可能性を示すものである。」

以上は、Claude Duret, *Thesor de l'histoire des langues de cest univers, contenant les origines, beautez, perfections, decadences, mutations, changemens, conversions, & ruines des langues, chinoise, iaponoise, iavienne, indienne occidentale, Seconde edition*, Yverdon, 1619 からの部分訳である。著者はフランスの言語学者。

日本語については、先行文献、Giovanni Pietro

Maffei, *Historiarum Indicarum libri XVI*, Florenz, 1588、および A. Thevet, *La Cosmographie universelle* (未詳、この資料集には収録されていない)、アレシヤンドウロ・ヴァリニャーノ『日本巡察記』などを下敷きにしながら論述されており、日本語に関する著者自身の知識はあまり正確ではないように思われる。

ヨーロッパでは日本語のカリグラフィが好奇の目をもって受け入れられた。デュレも毛筆で書かれた日本語を木版で掲載している。これは周防の領主が山口に「大道寺」という教会を建立することを認めて、天文二年八月二八日にイエズス会に与えた許可状である。この文書はすでに一五九八年と一五九二年に出版物の中で発表されていてすでに広く知られていたと思われるが、デュレみずから再度これを版に刻んだものらしい。部分的に天地が逆になっていたりするところにも、著者の日本語についての識字能力の程度がうかがわれるのであるが、いっしょに掲げられている、やはり毛筆書きの「いろはアルファベット」と漢数字でも、とんでもない間違いをおかしている。いろは歌に一字一字ローマ字で表記した発音を添えているのだが、どういうわけか、これが五文字を除いて、めちゃめちゃである。「いろはアルファベット」を紹介したフランス語文献としては、この

資料集に見る限りでは最初だと思われるが、これを真に受けて日本語のひら仮名の読み方を取り違えて覚えたヨロツバ人はいなかったらうか。

風俗、風習

「彼らは確かにわれわれの倫理的な対蹠人であるといえる。彼らは男も女もみな無帽で出歩く。そして、われわれは敬意を表そうとする時、帽子をとって挨拶するのに対して、彼らはそのような時には、うやうやしく履物を脱ぐ。われわれの場合立ち上がつて友人を迎えるのが礼儀なのに、彼らは座って迎えるのが、謙虚なやり方だという。彼らにとっては、ほかの国の人々の場合でもそういう例は多いが、黒は喜びの色である。これに反して白い色は彼らが喪の悲しみに沈んでいる時に使われる。だから、うんと黒い歯が美しいとみなされ、われわれのうちで最も身嗜みにうるさい者が歯を白くしようと気を配る以上の細心さで、わざわざ手を加えて黒くするのである。彼らの嗅覚は概してわれわれが快いと感じるものはすべて嫌う。おそらくそのせいであろうが、われわれの薬は非常に臭くにがいのに反して、彼らの薬はとも口あたりがよくて、いい匂いがするようだ。

彼らの味覚は、肉や飲み物に關しては、われわれの味覚と異なっている。彼らはかならず飲み物を熱くしてしか飲まない。そうすると痛風や尿結石に罹らないという。聴覚について言えば、われわれは彼らの音楽は耳障りな不協和音にしか感じられず、我慢ならないのに、彼らにとっては最も快いシンフォニーなのだ。彼らの行動が、たいがい、われわれの行動と異なるということは、考え方の原理が、われわれの従う原理にまったく反しているという証しである。われわれが馬に乗るさい、ほとんど常に左側を選ぶのと正反對に、彼らは右側から乗る。われわれは必要上、あるいは予防上、しばしば瀉血するが、彼らはそれを自然に反することだと頑なに信じているので決して行なわない。われわれは概して病人には良く煮た塩辛いもの、のしか食べさせないが、彼らは、病人には、わざわざ選んで、最も刺激の強い最も塩辛いものを生で与えるという方法をとる。われわれの場合は、若鶏や消化のよいほかの鳥肉も病弱者の最も普通の食物だが、彼らは魚肉、牡蠣、その他の貝類を食べるよう勧める。結局、神と自然が面白がつて、日本人の住むこの土地をあらゆることがらにおいて、われわれの住む世界とはあまりにも異なるよ

うに創ったようだ。日本では、植物さえもヨーロッパの植物とは非常に異質なので、名のない、少なくとも何というものなのか分からない奇妙な植物が見られる。それは、雨にあたると命とりで、ほんのちょっとした湿度でも枯れてしまうという植物で、それを枯らさない唯一の治療法は、根を陽に曝すことである。このようにして乾かしてから、新たに穴を掘り、そこに十分に乾燥した砂利か鉄の削り屑でも一杯に撒いて植え直すと、その植物はまた元気になるのである。

まさしく、これらは見事な対照であり、ある人たちが一律不変だと信じている人間の理性が、人間相互の相容れない性質や相互の相異なる体質によって、きわめて多様なすがたを帯びるのだということを分かせてくれる。」

日本に渡来した当時のヨーロッパ人が、いちばん戸惑ったのは、風俗習慣の違いだったと思われる。好奇心、好感、賛嘆、驚き、不快感、苛立ち、誤解、偏見、絶望といったプロセスを経て日本を去った者、あるいは、特殊性を積極的に評価しつつ生涯日本に止まった者など、さまざまだったであろう。

たとえば、同じ船で渡来し、同じ時期に行動をとると

しつつ布教活動に従事したポルトガル人宣教師フランシスコ・カブラルとイタリア人宣教師ニエッキ・ソルド・オルガンティーノは、日本人観が両極端に分かれ、それぞれ悲観・楽観の二つの典型を示していて興味深い。カブラルは、「私は日本人ほど傲慢で貧欲で、不安定、かつ偽装的な国民を見たことがない」という、欠点を極度に強調した基本認識で日本人を見、オルガンティーノは「日本人は全世界でもっとも賢明な国民に属しており、彼らは喜んで理性に従って行動するので、われわれヨーロッパ人よりはるかに優れている」として、長所をあまりに評価しすぎている。

ここに挙げたFrançois de la Mothe le Vayer, *De la re traite de la cour, Lettre XCIV*, Paris, 1652) の論述は、現代から見れば滑稽に思われるほどあまりに些末な相違をあげつらった挙句に、日本人をヨーロッパ人の「倫理的な対照人」(des antipodes moraux) とぎめつけ、人間理性の一律不変性の否定という結論を引き出してくるところに、異文化比較論につきまとう、ある種の理念の飛躍を感じてしまう。特定の固定観念で異国の風俗をみて、単なる小さな習慣の違いにすぎない現象から、あまりにせっかちに、民族主義的な、あるいは思想的な意味を引き出すという弊に陥りがちである。なお、この des antipodes moraux

という表現は Pietro Maffei のもの。当時は日本人論のキーワードになっていたようで、一八世紀には Voltaire も彼の *Essai sur les mœurs* の中で引用している。

この日本人論には先行論文の下敷きがあり、著者の直接的な体験によるものではない。これも Giovanni Pietro Maffei, *Historiarum Indicarum libri XVI*, Florenz, 1588 に拠っているほか、ルイス・フロイスの『日欧文化比較』（岡田章雄訳「大航海時代叢書 XI」岩波書店、一九六五年）とアレシヤンドゥロ・ヴァリニャーノの『日本巡察記』から借りている。

敬意の表しかた、客の迎えた、色彩のこと、おはぐろのこと、音楽のこと、嗜好のこと、病人の食事のことなどほとんどがヴァリニャーノの文の引き写しであり、色彩、おはぐろ、熱い飲み物、音楽、馬の乗り方、医療法などについてはフロイスの書物の中にも同じ記述がある。

キリスト教

当然ながらイエズス会関係の文献がもっとも多いが、その中でも主要文献は、フランソワ・ソリエの『日本教会史』François Solier, *Histoire ecclésiastique des îles et des royaumes de Japon*, Paris,

1627 である。

日本の風土、産物、行政体制、風俗、風習、身体的・精神的特性、言語、歴史、仏教界の状況などを概観して、日本がヨーロッパのキリスト教世界にいかにして発見されるに至ったか、アンジロウとフランシスコ・ザヴィエルとの出会い以来、宣教師たちが日本に渡来してどのような布教活動を展開してきたかを克明にあとづけ、秀吉の死の三年前一五九五年までで一卷が終わり、それに二巻が続くのだが、この資料集では、なぜか二巻の目次が紹介されていないので、内容がわからない。ただ、二巻の二章だけが、原文で収録されている。これは細川忠興の妻ガラシャの死を伝えたものである。ソリエは日本滞在の経験をもっているようであるが、滞在中の伝聞なのか、それともイエズス会の報告文書、特にオルガンティノ神父の書簡などから得た情報なのか、その辺のことは不明である。

「タイフサマ「家康」に対する連合軍の反乱中に大阪の町で起きた丹後の王「藩主」の夫人 Madame Grace「細川ガラシャ夫人」のいたましい死。

タイコー「太閤」の息子で後継者の幼君のそば近く、彼の亡父の命令に従っていつも城中に控えている諸侯、大領主のほかに、この動乱が始まる

と大勢の武士が駆けつけた。ダイフサマ側についてカントー「関東」の戦い「関ヶ原の戦い」に子供たちを送った部将たちはすべて、大阪の町で連合軍が戦いを宣するとその御殿「伏見城」において防備を固めた。ダイフサマとともにみずから戦いに赴いた領主たちが、財産と家族を守るため邸や御殿に残した家老たちも同様に戦いに備えた。幼君の側近で摂政職にあった大老たちが、各藩主に、ダイフサマに敵対することを誓言するよう、さもなければ人質を差し出すように要求してからは尚更だった。それに対して激しい抗議があがると、摂政役たちは服従することを拒否した何人かの藩主の御殿を攻囲し、幼君の敵として、それを壊滅せしめた。

この動乱中に、丹後の藩主 Iocundono 「越中殿細川忠興」の妻で、名をガラシャというキリスト教徒のきわめて悲しむべき事件が起きた。越中殿はダイフサマに従ってカントーの戦いに出ていた。この優れた領主は、異教徒ではあるが、妻の名譽が失われることのないよう心をくだいていたので、彼は留守にする度ごとに筆頭家老 Onga-zauradono 「小笠原殿」と護衛武士たちに、もし留守中彼の妻の名譽が危険にさらされるような

事態が生じたなら、いっそ彼女を死なしめ、全員切腹して彼女とともに死すべしと命じていた。彼がカントーの戦いに出陣するにさいしても、そう命ずることを忘れなかった。

大阪で連合軍が結集した当日、幼君の摂政役たちは丹後の藩主の邸を守護している者たちに、ガラシャ夫人を渡すよう命じ、彼女が夫に代わって誓言すべきだと言った。留守居役たちは彼らの奥方さまを引き渡すことを拒否した。邸をただちに攻囲し奥方を捕らえると通告されたので、彼らはかねて主人が指示していた事態が到来したと判断し、命令を実行しようと決意した。彼らは急遽奥方さまに一部始終を申し上げると、彼女は一言も言わず、日頃美しく飾りつけておいた礼拝室に入り、蠟燭をともしせ、死に臨んで祈りを捧げた。

時が切迫していたので、神の加護を祈ったあと毅然として礼拝室を出ると、彼女に仕えてくれた婦人たちが全員を集めて最後の別れを告げ、邸のこの場所から立ち去れと指示し、夫がそう命じているから私はひとりで死にたいと言った。女たちは彼女のもとを離れることを承知せず、主人である奥方さまといっしょに死にたいと抗弁した。この名譽に関する日本の慣習は、主君に仕える者はこ

のような事態にさいしては主と境遇をとにもすることを求めているから、というばかりではなく、

この徳の高い奥方は身内の者たちから非常に愛され慕われていたので、だれもが彼女の死の道連れになりたがつたのである。が、屋敷から立退くよう強く申し渡したので、彼女らもそれに従った。

そうしている間に、筆頭家老と警護の武士たちは、すべての部屋部屋に火薬を撒き散らし、ガラシャ夫人がひまをとらせた使用人たちを外へ出すと、びしゃりと門を閉ざし、彼女のもとに取って返した。有徳の奥方は突如跪きみずから着物の襟をおろし、イエスとマリアのいと聖なる御名を唱え、首を切り落とされた。忠実な従卒たちがすぐに亡き人の遺体を絹布で包み、火薬を振りかけると、奥方の亡骸が横たわっている部屋で死ぬのは不敬な行為であると考え、別な部屋に引き下がつた。そして、折り重なって倒れ、火薬に火を放つた。ほどなく彼らの死体もろとも屋敷が吹き飛んだ。

全員キリシタンだった腰元たちは、ただちに神父オルガンティーノのもとに赴き一部始終を語った。神父はガラシャ夫人のような徳の鑑を日本のキリスト教界が失ったことを深く悲しんだ。もし

彼女らが起ころうとしている事態を神父に知らせることを思いついていたら、この敬虔な奥方が死の刃を受ける前に彼女を守る方法もあったはずだ。彼女は証文を差し出すことだってできたのだ。しかし神父はすべてを最善のものにしてくださる。彼女は死を神の全能の御手として、みずからの過ちの贖いとして受け入れた。

彼女は魂の教化と安らぎを求めて神父たちと語り合うことを非常に好み、この目的のために、ヴァンサン神父が贈った入門書だけを頼りに教師にもつかず、われわれの言葉を読み書きすることを覚えたのだった。

鎮火してから、オルガンティーノ神父は、亡き人の遺骨を見つけてキリシタンとして正式に埋葬してやろうとして、敬虔なキリシタンである一人の奥方を、連れの者たちといっしょに行かせた。完全な灰にはなっていない骨が見つかり、神父たちは、あたかも遺骸がそのまま残っていたかのようになり、葬儀を営んだ。惻隠の涙なしにはいられなかった。丹後の藩主は、神父たちが、頼まれもしないのに亡き人の葬儀をしてくれたことを大いに喜んだ。」（「内注記は大場」）

自殺を大罪としているキリスト教会側が、細川ガラシヤ夫人の「自害」をどう見ていたかが分かる貴重な文献である。夫人の意図がどうであったにせよ、この事件がもっていた意味は、すぐれて政治的なものであった。教会がガラシヤ夫人の死をキリスト教徒の殉死に準ずるものとして正当化するために苦慮している様子がうかがえて興味深い。

この敬虔な婦人の死は、「烈女」の原型として、日本女性のイメージを強烈にヨーロッパ人に印象づけ、そのインパクトは後世のたとえば「マダム・バタフライ」の人物像などにまで届くことになる。

仏教

イエズス会が、異教国日本で布教を始めるにさいし、在来宗教に対しては、教義上の理論闘争で優位に立つことと、政治権力者を味方につけ搦め手から追い落とすことを戦略の柱にしていた。かれらが特にターゲットにしていたのは、仏教諸宗派であり、キリスト教会はあらかじめ仏教の教義についてかなりの研究をしていた。布教の初期、信長に取り入ることができて、イエズス会の目論みは成功した。信長にとって天下一統を成し遂げるために仏教勢力を壊滅することが緊急事だったからである。現世を支配しようとする者と精神界を支配しようとする

者の思惑が一致し、両者の蜜月が短い間続いた。

日本古来の神道と仏教に対する批判をばねに、キリスト教の優位性を確立しようというのが教会側の戦術だった。宣教師たちは、布教上の必要もあって、在来宗教の現状を逐一ヨーロッパに報告していた。こうして一七世紀には、かつてマルコ・ポーロが「偶像崇拜者の住む島」と呼んだ日本の異教徒たちに関する情報、偏見や誤解や悪意によって歪められた論説も多かったとはいえ、ヨーロッパのキリスト教世界に知れ渡っていた。

たとえば、フランスのプロテスタントの哲学者、ビエール・ベールが『彗星雑考』（一六八二年）、『歴史批評辞典』（第二版、一七〇二年）[Pierre Bayle, *Pensées diverses écrites à un Docteur de Sorbonne à l'occasion de la Comète qui parut au mois de décembre 1680, & Dictionnaire historique et critique, seconde édition, revue, corrigée et augmentée, Rotterdam*]の中で、日本の神道・仏教に対する痛烈な批判を展開しているが、彼の情報源は、カトリックの聖職者ルイ・モレリの『大歴史辞典』（一六七四年、一六九九年版）[Louis Moréri, *Le grand dictionnaire historique ou le mélange curieux de l'histoire sacrée et profane*, Lyon]、アン

トニーニ・ポセヴィーノ神父の『精撰文庫』（一六〇三年）[Antonini Possevis, *Bibliotheca selecta de ratione studiorum*, Venice]、一七・八世紀ヨーロッパ各地で広く購読された『學術新聞』[*Journal des Sçavans*]、フランソワ・ソリエの『日本教会史』（前出）など多数にのぼっている。

ペールの論述は異教的偶像崇拜批判、迷信批判のテーマに集中する。にせ神と悪魔に捧げる寺院を建て、猿や牝牛を拝み、火山で悪魔におうかがいをたて、信心の固さの証しとして聖人の位まで上がる段階をふむため、みずから生き埋めになったり入水したりする、などという盲目の恐るべき迷信からくる愚行は、神に対する最大の侮辱、不敬のきわみ、大罪であり、無限、永遠、至福という真の神の属性を欠いた異教は空想の産物にすぎず、架空な神を座に据えた偶像崇拜は無信仰、無神論より罪深い、というのがペールの基本的な異教論である。

日本人は二種類の神をもっている、とペールは言う。第一は悪魔たちで、日本人はこれをいろいろな形のもので拝むのだが、救いを求めるためというよりは害を受けるのをおそれるからである。第二はアマダとシヤカで、アマダはさまざまな奇怪な偶像の形で表される。ミヤコの近くにある長さが五〇〇ピエもあるアマダの寺院には、純金の偶像が千体もある。日本には一二の宗派があり、

誰でも好きな宗派を奉じる自由があり分裂を惹き起こすわけでもないという状況が、新旧両派の抗争のすえオランダへの亡命を余儀なくされたペールには理解しにくいことだったにちがいない。日本の諸宗派を最も概括的に分類すると、外面的なものにとどまる宗派と、感覚では捉えられない内面的な実在、真理と呼ばれる実在を求める宗派に分かれる。第一の分類にはいる宗派も、現世のあの来世は認めており、彼らが言うには、彼岸にはこの上ない至福を味わえる国がある。ホトケの法を守る者は彼岸で生まれかわり、ホトケにより変身し、三三の姿と八〇の性質を与えられ、自分に満足しつつ嬉々として暮らす。ただし、女は本性穢れたいまわしい存在なのでいれてもらえない。ホトケの法を破った者は地獄に堕ち六種の刑罰を受けるが終りはない。これが、アマダ、シヤカ、ホトケを奉ずる宗派に共通する一般的な教理であり、無学な庶民のために「でっちあげられた」説で何ひとつ真実なものはない。このことはボンズみずから公然と認めている。第二の分類にはいる宗派は、天国や地獄を否定し、外面的なものを顧みず瞑想に没頭し、言葉を超越した「即心即仏」と呼ぶ修行に専念する。彼らによれば、万物の本源は一つしかなく、その本源はいたるところにあり、人間の心も諸存在の内面も、その本源と異ならず、すべてのものは滅びれば共通の本源に戻る。その本源は

永遠の昔から存在しており、単一で、明るく、光り輝き増減せず、形をもたず、ものを考えず、無為と全き安らぎの中にある。学は無知と異ならず、悪と善は二つのものならず、一方は他方と切り離せない。スピノザの説と類似し、神から世界の統治を剥奪するという点でエビクロス派にも似るが、ベールは、こんな常軌を逸した、不合理な矛盾だらけの考えがボンズたちにとりついたのは、いくら驚いても驚きたりないほどだと言ひ、宣教師たちとの討論でボンズたちが質問や反論に満足に答えられず、第一原理の本性に関する自説の裏付けをすることが出来なかったと指摘している。

ベールの批判の矛先は、ボンズの道德的頹廢にむけられる。ボンズは葬式をしては金を儲け、来世の幸せを約束して無知な民衆に喜捨を強要し、独身生活を旨とし肉や魚を慎み髪を剃り謹厳な生活を見せ掛けながらその下に放蕩を隠している、と手厳しい非難をあげせる。日本に渡来した宣教師たちが一様に最も啞然としたのは、ボンズたちの性的な無軌道ぶりであった。尼僧や女性信徒たちとの放埒な性交渉もさることながら、ザヴィエルをはじめ多くの宣教師たちが強い衝撃をうけ、本国への報告書にも書いたのはボンズたちの「男色」であった。ベールは、女との交わりは卑しく穢らわしいこととして禁じているのに、男色が、まともなこと、道德的なことと

して是認されていることを難じ、男色は大罪であると弾劾している。

さらに、日本の宗教が自殺を神神に喜ばれる行為として認めているために、多くの日本人が些細な理由から切腹し、入水し、焼身し、母親が子供を殺す、しかも、ナミアミダブツと唱えれば許され、償いの刑罰も無視される。秩序に反する行為や罪に門戸を開放するこのような宗教はおぞましい有害な結果を生むものだ、と結論づけている。

ベールは日本の在来宗教を仮借なく批判しているが、彼の目論みは、異教の批判を通じてキリスト教の護教をすることにあったのではない。異教の虚偽と愚行の批判を、返す刀で、キリスト教内の過ちと欺瞞の批判に転化することこそ、ベールの批評活動の真の目的だったのである。

日本の権力者がキリスト教布教を禁じたことについて、ベールはこれを是認している。亡命プロテスタントとしての閥歴を割り引いたうえで考えてみても、このようなスタンスを取り得たというところに、彼の、時代や党派を超えた革新性、のちに「ゲリラの首領」とか「解体の哲学者」とか呼ばれるベールの強靱な相対主義的批判精神があったことは否めない。彼によれば、一六世紀のキリスト教は、初代キリスト教のような神の恵みと加護に

この資料集については、加藤二郎教授に種々ご教示いただいた。厚くお礼を申しあげる。

値しない、殺戮に慣れ血に飢えた人殺しの宗教に成り下がり、すでに真のキリスト教ではなかった。日本人がとるべき最善の道は真の神に改宗することだったが、キリスト教も彼らに真の神を与えなかった以上、彼らに残された道は、迫害するか迫害されるかしかなく、どちらかを選ぶほかなかったのだ。キリスト教徒スペイン人は早晩武器を取ってアメリカで行なったように残忍な掠奪をし、日本人を殺し日本国中を支配したにちがいない。だから、「政治的な観点だけから見れば、キリスト教徒が日本で被った迫害は、君主制の転覆と国の荒涼を未然に防止するための慎重な配慮が取らせた手段である」というのがベールの見解である。

一七世紀ヨーロッパの日本関係文献のうち、ビエール・ベールのものが最も重要かも知れない。日本に関する新しい情報をもたらしたからではなく、一八世紀の啓蒙思想の先駆者といわれる彼の思想全体が後世に与えた影響の大きさによってである。

（邦訳『ビエール・ベール著作集』全八巻、野沢協訳・解説、法政大学出版局、一九七八年）

本稿で使用了資料集 *Japan in Europa*
は神奈川大学図書室（平塚キャンパス）所蔵。
整理番号（210/J 24/1, 2, S）。